

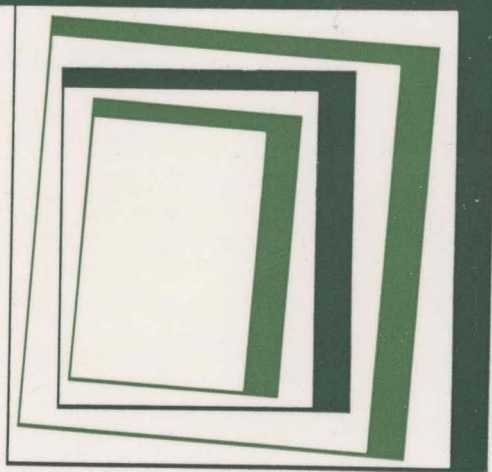
遊部 久蔵 小林 昇 杉原 四郎 古沢 友吉 編

講座 経済学史

Ⅲ

編集者代表 遊部 久蔵 杉原 四郎

マルクス経済学の生成と確立



同文館

遊部 久蔵 小林 昇 杉原 四郎 古沢 友吉 編

講座 経済学史

III

編集者代表 遊部 久蔵 杉原 四郎

マルクス経済学の生成と確立

同文館

〈編集者紹介〉

遊 部 久 蔵

1914年 東京に生まれる

1937年 慶応義塾大学経済学部卒業

東洋経済新報社、東亜研究所を経て

1947年 慶応義塾大学経済学部講師

同・助教授、同・教授を歴任、経済学博士

1977年12月12日 歿

主 著 『師値論と史的唯物論』(1950年、弘文堂)

『資本論』研究史』(編著)(1958年、ミネルヴァ書房)

『労働価値論史研究』(1964年、世界書院)

『商品論の構造』(1973年、青木書店)

杉 原 し り 四 郎

1920年 京都に生まれる

1941年 京都大学経済学部卒業

京都大学助手、兵庫県立医科大学予科教授、関西大学
教授を経て

現 在 甲南大学経済学部教授、経済学博士

主 著 『ミルとマルクス』(1957年、ミネルヴァ書房)

『マルクス経済学の形成』(1964年、未来社)

『マルクス・エンゲルス文献抄』(1972年、未来社)

『経済原論Ⅰ—「経済学批判」序説—』(1973年、同文
館)

《検印省略》

昭和54年7月25日 初版発行

略称—経済学史Ⅲ

『講座 経済学史』

Ⅲ マルクス経済学の生成と確立

編集者 遊 部 久 蔵
杉 原 し 四 郎

発行者 中 島 朝 彦

発行所 同文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町1-41 〒101

電話(東京)294-1801~6 振替東京0-42935

© K. Asobe
S. Sugihara

印刷：藤本綜合
製本：トキワ

Printed in Japan 1979

『講座 経済学史』の刊行にあたって

近年、わが国の経済学史研究上の成果にはきわめて注目すべきものがあり、ひろく多角的・専門的な諸業績が数多く公表されている。しかしこんにち、大きく経済学史の全体像を——とりわけ、初学者をも対象として——的確かつ平易にうきぼりにするという点では、いまだかならずしも満足しうる状況にはおかれていないものがあるように思われる。そこで私たちは、版元・同文館からの要請にもとづき、ここに先人・先達の研究諸成果をできるだけ批判的・内在的に継承・発展させるという基本的姿勢のうえにたって、本講座の編集・刊行を意図することになった。

もとより、国の内外にわたって膨大な諸文献を整理・点検し、高度の学問的水準を保ちながらも、平明な叙述で経済学史の鳥瞰図を描きだすということは、けっして容易な作業ではない。だが、幸い、経済学史上の様々な専門領域にわたって、学界各位のご協力とご鞭撻をえることにより、この講座が多少なりとも所期の目的を達成することができるならば、私たちの喜びはこれにすぎるものはない。

なお、本年は、アダム・スミス『諸国民の富』（1776年）の発刊200年にあたっている。そして、これを記念するいろいろな集いや出版が世界・各地で企画実現されているようである。といって、こうした記念行事に安易にあやかるとも思はないが、本講座がそれなりに、アダム・スミスにたいするささやかな一モニュメントとしての意味あいをもつことがゆるされるならば、これまた私たちの望外の幸せである。

1976年6月

『講座 経済学史』責任編集者

遊部久蔵 小林 昇 杉原四郎 古沢友吉

目 次

序 説	3
1 マルクス経済学の学史的位	3
2 マルクスの人物とその時代 (1840年代まで)	5
3 マルクスの人物とその時代 (1850年代以降)	8
4 『資本論』の対象と構造	11
5 比較経済体制論としての『資本論』	16
第1部 マルクス経済学の生成	21
第1章 1840年代	21
第1節 ヘーゲル法哲学批判から経済学批判へ	21
1 ヘーゲル法哲学批判の課題 (21)	
2 ヘーゲルの思弁的方法の批判 (22)	
3 市民社会と人間の自己疎外 (24)	
4 プロレタリアートと哲学 (26)	
第2節 経済学批判の基礎視角の設定	28
1 バリ時代の経済学研究の概要 (28)	
2 市民社会と貨幣 (30)	
3 私的所有と疎外された労働 (34)	
4 唯物史観の成立と「哲学的意識」の清算 (37)	
第3節 経済学諸範疇の整備	41
1 ブルードン、リカードゥ、マルクス (41)	
2 ブルードンの経済学批判の方法の批判 (43)	
3 『哲学の貧困』における経済学の範疇把握 (46)	
第4節 経済学批判体系の構築をめざして	49
1 「賃労働と資本」の意義 (49)	

- 2 賃労働範疇の歴史的批判的把握 (50)
- 3 資本範疇の歴史的批判的再把握と剰余価値 (52)
- 4 資本蓄積にともなう労働者階級の窮乏化と恐慌 (53)

第2章 1850年～1867年……………57

第1節 50年代前半における経済学研究……………57

- 1 貨幣論研究と「論評」 (57)
- 2 リカードウ『原理』抜粋および評注 (59)

第2節 『経済学批判要綱』——『資本論』第1次草稿——……………62

- 1 「バスティアとケアリ」 (62)
- 2 「経済学批判・序説」 (65)
- 3 「貨幣にかんする章」 (69)
- 4 「資本にかんする章」 (72)

第3節 『経済学批判』と経済学プラン……………77

- 1 『経済学批判』の準備 (77)
- 2 『経済学批判』 (80)
- 3 「第3章 資本一般」への準備 (81)

第4節 「23冊のノート」——『資本論』への旋回……………83

- 1 「資本の生産過程」把握の前進 (83)
- 2 転化論 (84)
- 3 絶対的剰余価値論 (87)
- 4 相対的剰余価値論 (88)
- 5 『剰余価値学説史』への旋回 (91)
- 6 社会的再生産＝流通の諸条件の析出——『剰余価値学説史(Ⅰ)』 (92)
- 7 剰余価値の特殊的諸形態への転形——『剰余価値学説史(Ⅱ)』 (95)
- 8 資本物神認識の総括としての「三位一体的範式」批判——『剰余価値学説史(Ⅲ)』 (100)

第5節 『資本論』第3次草稿から『資本論』第1巻・初版

発刊へ…………… 104

- 1 『資本論』第3次草稿の執筆 (104)
- 2 『資本論』第1巻・初版の発刊 (107)

目 次

第2部 マルクス経済学の確立	109
第1章 『資本論』総論, 第1巻解説	109
第1節 総 論	109
1 経済学批判体系と『資本論』 (109)	
2 『資本論』の基本性格 (111)	
第2節 商品・貨幣論	114
1 商品論の視座 (114)	
2 商品論の構造 (116)	
3 交換過程(貨幣の必然性) (119)	
4 貨幣の諸機能 (119)	
第3節 貨幣の資本への転化	122
1 資本の歴史と資本の論理 (122)	
2 資本の一般的範式の意味 (124)	
3 労働力商品の指定 (126)	
第4節 剰余価値の理論	127
1 資本の生産過程の構成 (127)	
2 絶対的剰余価値の生産 (129)	
3 相対的剰余価値の生産と生産力の展開 (130)	
第5節 資本蓄積論	132
1 資本蓄積論の方法 (132)	
2 再生産の資本主義的形態 (133)	
3 資本主義的蓄積の一般的法則 (134)	
第6節 総 括	136
第2章 『資本論』第2巻解説	139
はじめに	139
第1節 資本の循環	141
第2節 資本の回転	144
第3節 社会的総資本の再生産と流通	148
1 ケネーとスミス (149)	
2 再生産表式論 (151)	
3 再生産表式論の意義と限界 (160)	

4 『資本論』以後 (167)	
第3章 『資本論』第3巻解説……………	171
第1節 『資本論』体系における第3巻の意義……………	171
1 「経済学批判体系プラン」から『資本論』体系への 発展 (171)	
2 『資本論』の3巻構成の成立と古典経済学の限界の 克服 (173)	
3 『資本論』の体系構成における第3巻の位置づけ (174)	
第2節 資本と利潤・利潤率低下法則……………	177
1 『資本論』第3巻における第1～3編の位置づけ (177)	
2 剰余価値の利潤への転化 (177)	
3 利潤の平均利潤への転化・価値の生産価格への転化 (179)	
4 利潤率の傾向的低下の法則 (183)	
第3節 商業資本と商業利潤……………	186
1 概説——産業資本の総運動からの商業資本の自立化 (186)	
2 商品取引資本 (188)	
3 貨幣取引資本 (190)	
4 商業資本にかんする歴史的考察 (191)	
第4節 利子生み資本と信用制度……………	193
1 概説——『資本論』第3巻における第5編の位置づ け (193)	
2 利子生み資本 (195)	
3 資本主義的生産における信用の役割 (198)	
4 利子生み資本と信用制度Ⅰ——流通手段と資本、銀行 資本の諸成分—— (201)	
5 利子生み資本と信用制度Ⅱ——貨幣資本と現実資本—— (204)	
6 利子生み資本と信用制度Ⅲ——信用制度と貨幣(世界 貨幣)、貴金属と為替相場—— (207)	
7 利子生み資本にかんする歴史的考察 (209)	
第5節 土地所有と地代……………	210
1 概説 (210)	
2 差額地代 (212)	
3 絶対地代 (216)	

4 資本主義的地代の生成 (217)	
第6節 諸所得とその源泉—『資本論』体系の結び	220
1 三位一体的定式 (220)	
2 分配関係と生産関係—生産関係と生産力 (222)	
3 『資本論』体系の結び (224)	
文献案内	227
人名索引	233

『講座 経済学史』

Ⅲ マルクス経済学の生成と確立

序 説

1 マルクス経済学の学史的位置

経済学の歴史には、個人の名前を冠した経済学がいくつかある。リカードウ経済学とか、マルクス経済学とか、ケインズ経済学とかがそうである。リカードウ経済学 (Ricardian economics) とリカードウ (David Ricardo) の経済学 (Ricardo's economics) とはちがう。リカードウの経済学がマルサス (Thomas Robert Malthus) との論争を通じて強化され体系化され、ミル (James Mill) やマカロック (John Ramsay McCulloch) らの信奉者たちによって普及し、自由貿易運動と結びついて社会に大きな影響をあたえるにいたったとき、いいかえればそれが理論的・実践的な力をそなえた一つの学派を形成するようになったとき、人はそれをリカードウという個人の経済学と区別して、リカードウ経済学と呼ぶ。マルクス (Karl Marx) の場合も同様であって、マルクスが多年の努力の末リカードウ経済学を主軸とする古典派経済学 (本講座Ⅰ『古典派経済学の形成と発展』を参照) の全面的な検討を通じて『資本論』体系を完成し、エンゲルス (Friedrich Engels) やカウツキー (Karl Johann Kautsky) らの信奉者たちによって普及し、社会主義運動と結びついて大きな社会的影響を呼びおこすにいたったとき、リカードウ経済学と同じようにマルクス経済学 (Marxian economics) という呼称が生まれた。そしてマルクス経済学は、一方では古典派経済学を理論的にのりこえる——歴史派経済学は古典派の理論的克服に失敗したのに反し——ことに成功したものであるとともに、他方では近代経済学 (ケインズ経済学は近代経済学の有力な学派であるが、それに属する一学派であるにすぎない。この点については本講座Ⅶ『歴史派経済学と近代経済学』、とくにその第2部第3章を参照) と全面的に対立しつつ現在まで発展してきた経済学でもあるのだから、経済学史上にしめるその位置がリカードウ経済学やケ

インズ経済学とくらべて一層大きいということは、容易に推測されるであろう。

この点はつぎのことを考え合せると一層はっきりする。リカードウとケインズ (John Maynard Keynes) の名は経済学史のうえにはしばしば登場するが、政治学史や社会思想史や哲学史にはほとんど姿を見せないのに対し、マルクスの名はそのいずれにも大きな地位をしめているのだが、それはマルクスの思想が、経済学を中核とする社会科学全体を包括するものであり、さらにそれが新しい哲学的世界観によってささえられた体系的なもの——これをマルクス主義 (Marxism) と呼ぶことが多い——だからである。古典派の経済学者でもスミス (Adam Smith) やジェームズ・ミルの息子のミル (John Stuart Mill) の場合は単なる経済学者にとどまらず、かれらは同時に社会学者ないし哲学者でもあったのだが、リカードウは経済学の研究に集中し、それに集中することによって古典派のなかでもっとも大きな理論的業績をあげることができた。また近代経済学は元来学問の分業化・専門化・脱哲学化を通じて経済学の科学性を純化しようとする意図をもっているから、経済学者が同時に他の学問領域や哲学にも関係することはむしろ禁欲すべきことであった。ところがマルクス経済学が古典学派を克服するためには、その経済学の根底にあり、その自由主義的イデオロギーをささえている人間観・社会観・歴史観にまで検討を及ぼす必要があり、新しい世界観に立ってそれらを根本的に批判しなければならなかった。マルクス経済学はこのようにして確立した新世界観と結びつくことによってはじめて、古典派経済学を全面的に克服することができたのであり、マルクスの死後今世紀に入っても時代の推移とともに発展して、歴史学派の流れを汲むウェーバー (Max Weber) (本講座Ⅶ『歴史派経済学と近代経済学』の第1部第3章参照) の思想やケインズ経済学と対抗しうる力をもつことができた。つまりマルクスは新しい経済学をつくりあげるために、必然的に経済学者だけにとどまりえず、広く社会科学全般について、また哲学の領域に研究をおよぼすことになったのである。

このようにマルクス経済学の経済学史上の地位は、リカードウ経済学やケインズ経済学と同一の次元で論ぜられるべきものではなく、古典学派と歴史学派・近代経済学とのあいだに位置づけられるべきものである。本講座が古典学派をとり

あつかう第2巻と歴史学派・近代経済学にあてられた第5巻とのあいだにマルクス経済学をおき、その説明に第3巻『マルクス経済学の生成と確立』、第4巻『マルクス経済学の発展』の2巻をあてたのもそのためである。そして第4巻が第5巻と併行して読まれるべきものであるのに対し、この第3巻は第2巻と関連させながら読むことがのぞまれる。第2巻の巻末にある人名索引でわかるように、第2巻にはマルクスの名が頻出する。つまりそこにはマルクスによる古典派批判の成果を前提とした叙述がふくまれているのであって、その意味では第2巻は第3巻を予想しているのだ。また本巻の人名索引にリカードをはじめ古典派経済学者たちの名前がならんでいることが示すように、本巻には第2巻での説明を前提としているところが少なくない。第2巻と第3巻とはこうして互いに補い合う関係にあるのである。

2 マルクスの人物とその時代（1840年代まで）

前節で述べたように、マルクスの経済学とマルクス経済学とは同じではない。だがマルクス経済学の創設者がマルクスその人であり、マルクスのライフワークである『資本論』によってマルクス経済学が確立されたことは事実である。一般に学問的業績や芸術上の作品を理解するうえに、その作者の人物とかれが生きた時代的背景を知っておくことが大切であるが、社会科学のようにその人の生き方や思想が学問的研究と密接に結びついている場合にはとくにそうである。いわんやマルクスのように、従来の経済学を根本的に変更するための新世界観の確立につとめるとともに、経済学の研究と社会主義運動の実践とを身をもって結びつけようとした人物の場合には、その業績を十分に理解するうえに、かれの人物と時代について知っておくことが不可欠となるであろう。この点についてくわしくは巻末の文献案内にあげられているマルクス伝にゆずるけれども、ここではマルクス経済学の把握にとってとくに重要と思われるいくつかの点を、マルクスの人物とその時代についてあらかじめ述べておくことにしよう。

(イ) 市民革命を17世紀にすませたイギリスや18世紀に終えたフランスにくら

べ、それをやっと 1848 年になって、しかも両国よりも不徹底な私たちでしかなしえなかったドイツをマルクスがその祖国にもったことは、かれの思想をプラス・マイナスの両面で大きく制約している。ドイツ社会の後進性は近代的な政治思想や経済学の自生的な形成をはばみ、17・18 世紀にはわずかに官房学 (Kameralwissenschaft) と呼ばれる行政技術的な財政経済思想が見られるにすぎず、19 世紀になっても経済学は国家学 (Staatswissenschaft) の一環という地位に甘んじていた。啓蒙思想もドイツではイギリスやフランスにおけるような市民社会の合理主義的個人主義的分析とむすびついたものではなく、人間の内面的・精神的自我の確立を求める方向をとってドイツの古典哲学を生み出した。ルソー (Jean Jacques Rousseau) の『社会契約論』(1762) とスミスの『国富論』(1776) に対応する同時代のドイツでカント (Immanuel Kant) の『純粹理性批判』(1781) が出版されていることは、フランスやイギリスとくらべてのドイツの特性をしめしている。このようなドイツの後進性が、マルクスが近代的な思想を身につけ、さらに進んで市民社会の構造と運動を解明しようとする場合に大きな障害となったことは想像に難くないであろう。事実マルクスはその障害を克服するために、1843 年ドイツを去ってパリにうつり、そこで経済学の本格的な研究をはじめたのであり、またブリュッセルで 1845～46 年に長大な草稿を書いてみずからのドイツ・イデオロギーの自己清算を果たさなければならなかったのだった。

だがこのようなドイツの事情は、その反面プラスに作用する側面ももっていた。後進国はまさに後進国なるがゆえに、先進国とは時間的にも空間的にも一定の距離をおいて先進国の事態を客観的に観察・分析することができ、そこから自国の進路を正しく導くうえでの教訓を引き出すこともできるわけで、ドイツ古典哲学、とくにその最高峯たるヘーゲル (G. F. W. Hegel) の哲学には、イギリスやフランスの社会変動の本質が論理的に凝集され体系化されていた。マルクスはその精髓を学びとることによって、近代西欧思想の最大の成果を継承することができたといってよい。とくにこの場合重要なことは、マルクスがヘーゲル哲学を学んだ 1830 年代には、すでにイギリスやフランスでは種々の社会主義思想が形成されており、それがドイツにも導入されていたという点である。ドイツは近代化という

課題をこうした労資間の矛盾から生じる新しい課題と同時に完遂しなければならないという事態に直面していた。そうした二重の課題によく対応しうる思想をもつためには、18世紀の啓蒙思想をそのままではなく、一段と深化したかたちで継承しなければならないであろう。マルクスはまさにそのような思想を、ヘーゲルに沈潜し、それを克服することによって獲得したのである。

(四) ところでマルクスにそれができたのは、何よりもかれ自身が、事物の本質を把握する強靱な思弁力と、理論を体系化する雄大な構想力の持主だったからであるが、それと同時に、かれがドイツでもっとも先進地帯であるライン河以西の進歩的知識人の家庭で育ち、ドイツの学問の中心であったベルリン大学で学生生活をおくることができたこともまたあずかって力がある。さらにかれがエンゲルスという生涯の盟友を与えることができたということを忘れてはなるまい。

同じラインの出身といっても、エンゲルスは紡績工場主の息子で、ギムナジウムを中退して実業生活に入り、ベルリンで軍務につくかわらへーゲル左派の人人とまじわって急進思想を身につけたうえ、業務見習のため1842年にイギリスのマンチェスターに赴き、そこで2年間資本主義の現実をつぶさに見聞した。マルクスは1844年の夏にエンゲルスが帰郷する途中パリに立寄ったときに会談して以来、かれとの終生かわらぬ交友関係に入るのだが、産業革命の実態を紡績業という基軸産業の現場で知り、経済学の研究や社会主義運動との接触においてもかれに一步先んじたエンゲルスという同志をえたことは、マルクスがドイツの後進性からの制約を克服し、マイナスをむしろプラスに転化してゆくうえに大きな力となった。三月前期(Vormärz)における研究の総括としてマルクスが書いた『共産党宣言』(1848)がエンゲルスとの共著であったということは、初期マルクスの思想形成にエンゲルスがどんなに大きな役割りを果たしたかを物語っているといてよいだろう。

3 マルクスの人物とその時代（1850年代以降）

(ハ) マルクスは1850年にロンドンで経済学の研究を再開した。ブリティッシュ・ミュージアムの図書館の文献を精力的に読破したかれは、1851年春には経済学を「もう5週間で全部片づけられる」とエンゲルスに告げ、その成果を経済学批判、社会主義、経済学史の三部作にまとめる構想で出版者に交渉をはじめにいたる。だがこの計画は流産し、『経済学批判』の第1分冊が公刊されるのは1859年6月をまたなければならなかった。しかもつづいて刊行されるはずの第2分冊以下は結局中止され、新しい出版計画にもとづく『資本論——経済学批判——』の第1巻は、やっと1867年9月に日の目をみることになる。マルクスが1845年2月にパリで経済学批判の著書の出版契約をむすんでから実に22年半の後であった。マルクスが自分の予想に反して主著の出版にこれほど長い歳月を要したのは、本稿の第1節や第2節の(イ)で述べた事情の他に、マルクス自身の性格、すなわち重要な文献で未だ眼を通せないものが一冊でもあるかぎり決して筆をとらない（エンゲルスのマルクスへの1851年4月3日づけの手紙参照、岡崎次郎訳『資本論書簡』(I)、国民文庫、95ページ）きびしい姿勢や、自分の著作の長所はそれが一つの芸術的全体をなしていることにあるのだから「全体が目の前にでき上がっていないうちは決して印刷させない」（マルクスのエンゲルスへの1865年7月31日づけの手紙、前掲書、363ページ）という慎重な態度によるところが大きいと思われる。だが一層基本的には、資本主義の経済的運動法則がマルクスによって解明されるためには、イギリスの、またイギリスを中心とする世界の資本主義体制が十分に成熟していなければならないという事情がある。1850年代末から60年代初頭にかけての世界の動き、具体的にいえば1857年10月におこった第1回の世界恐慌からアメリカの南北戦争の勃発（1861年4月）などをへて1864年9月の国際労働者協会（第1インタナショナル）の創立にいたる世界の変動は、まさに世界の資本主義がこのような段階に到達したことを示すものであった。マルクスは1857年から58年にかけて自分の経済学批判体系の『要綱』を、一方では眼前で進行する